

I. 研究の目的

約 70 年間にわたり「社会主義」の構築と維持を模索し、その後一転して市場経済化を志向することになったソビエト連邦の歴史的経緯とその特徴を探ることは、社会主義を理解するにとどまらず、資本主義について考察する上でも大変意味深いことであるとおもわれる。このような問題意識の下、本研究は「ソ連型社会主義計画経済」とはどのような体制であったのかを考察することを目的とする。

II. 論文構成

序 章 研究の動機と目的

第 1 章 ソ連型社会主義計画経済の発展と崩壊

第 1 節 ソ連型社会主義計画経済の発展

1. 戦時共産主義政策と新経済政策(ネップ)
2. 集権的計画経済体制の成立

第 2 節 ソ連経済の停滞と経済改革の試み

1. ソ連型社会主義計画経済の停滞
2. 利潤動機の導入と分権化による経済改革の試み

第 3 節 ソ連型社会主義計画経済の崩壊

1. ペレストロイカのはじまりと推移
2. 市場経済の導入とソ連崩壊

第 2 章 社会主義経済理論とソ連型社会主義計画経済

第 1 節 社会主義経済理論からみたソ連型社

会主義計画経済の不完全性

第 2 節 社会主義経済計算論争とソ連型社会主義計画経済

第 3 節 ソ連型社会主義計画経済の批判としての国家資本主義論

終 章 結論と今後の課題

III. 研究の概要

第 1 章では、「ソ連型社会主義計画経済」とはどのような社会主義経済体制だったのかを時系列にそって考察した。

第 1 節では、ロシア革命後のレーニンの時代からスターリンによる集権的計画経済体制の構築までを 3 つの時代に区分して概観した。当時のロシア(ソ連)がおかれた状況をふまえて、「ソ連型社会主義計画経済」の特徴と、それを生み出してきた要因について考察した。そして、繁栄期をむかえるソ連経済の成長要因を明らかにした。

第 2 節では、ソ連経済の停滞と集権体制の動揺について、その要因を考察した。次にフルシチョフによってはじめられた経済改革の試みと失敗について検討した。それは、経済停滞を打開するために計画経済の枠内において利潤動機を導入しようとした改革構想であったが、みるべき成果をあげることができなかった。フルシチョフによってはじめられた経済改革失敗の原

因を、集権的体制の特性から明らかにした。

第3節では、ゴルバチョフのもとで行われたペレストロイカと、その帰結であるソ連崩壊について考察した。長引く経済停滞と、様々な混乱が続くなかで始められたペレストロイカは、政治面において民主化を達成しながらも、経済面ではむしろ状況の悪化を招くことになった。ペレストロイカからソ連崩壊の過程をゴルバチョフの動向を中心に概観した。

次に、第2章では、第1章で検討した「ソ連型社会主義計画経済」の特徴と、それを生み出してきた歴史的要因を踏まえて「ソ連型社会主義計画経済」とはどのようなものであったかについて、社会主義理論に関する先行研究から考察をすすめた。

第1節では、ソ連型集権的計画経済の不完全性について、情報処理と利害調整機能の不備、労働市場と消費市場の存在、第二経済とヤミ経済の存在を検討することで明らかにした。市場メカニズムを極力排除し、ヒエラルキー的な構造のもと、現物経済による計画化が意図され、それは、あたかも実現されたかにみえた時代もあった。だが、それは擬制でしかなかったと思われる。市場的要素の強靱さについて言及しながら、ソ連型集権的経済体制のもつ様々な構造上の欠陥や問題点を明らかにした。

第2節では、社会主義経済計算論争から「社会主義」および「ソ連型社会主義計画経済」について考察した。ソ連崩壊後の後付の理論ではなく、社会主義システムが現実において実現可能なシステムであるのかという問いは、すでにロシア革命直後の1920年代から提起されていた。この論争にかかわった多くの論者のうち、社会主義システムが存立不可能であると主張したミーゼス、ハイエクらの理論と、反対に存立が可能であるとしたランゲ、ドップ、スウィー

ジーらの理論を概観した。

第3節では、「ソ連型社会主義計画経済」が果たして「社会主義経済」であったかを問い直した「国家資本主義論」をとりあげた。「国家資本主義論」は、ソ連および東欧諸国で成立した体制を「社会主義」とはみなさず、資本主義の独特の発展形態とする独自の立場からの議論である。そのため、異端な学説とみなされることが多い理論であるが、そこには鋭い分析がなされており、「ソ連型社会主義計画経済」を理解するうえで重要であることを明らかにした。

IV. 研究の成果と今後の課題

本研究の主要な成果は「ソ連型社会主義計画経済」が、「社会主義」と呼ぶには不完全な面があることを明らかにしたことである。第1に、ソ連における、事前の計画化によって経済を統制しようとする「社会主義計画経済」の試みは、人為によって排除しようとしても排除しきれない市場的要素の強靱さを示すものであったということである。第2に、当時のソ連がおかれた状況や、資本主義的に遅れた発展段階を差し引いたとしても、「社会主義」の実現がいかに困難であるかということである。

本研究の成果をふまえ、以下の2点を今後の課題としたい。本研究において充分にはたせなかった、マルクスおよびレーニンの原典をさらに検討することで、「社会主義」および「ソ連型社会主義計画経済」について考察を深めたい。また、第2章2節でとりあつかった経済計算論争は、未だ不十分であると思われるので、この問題についてもさらに検討したい。

主任指導教員 難波 安彦
指導教員 難波 安彦